

失ってこそ与えられる道 面白がつて生き、

新・農業経営者ルポ／第48回

(有)信州ファーム荻原 代表取締役

荻原慎一郎

長野県東御市

おぎはら・しんいちろう●1949年長野県生まれ。高校卒業後、自動車整備の専門学校を経て就農。当初は水田作のほか、薬用人参などの畑作を行っていたが、80年代に入って機械化を進め、水稻や麦を中心とする土地利用型農業を展開。95年(有)荻原を設立、06年(有)信州ファーム荻原に社名変更。現在、水田作50ha弱、麦・ソバ・大豆を中心に畑作が20ha。



本格的に農業経営を事業化しようと意気込んでいた矢先、農機に巻き込まれて片腕を失う事故に見舞われた若き経営者。運命を呪い、一時は農業をやめることさえ考えたが、そんな彼を支え、経営者としての歩みを決意させたのは、ボランティア活動で知り合った若者や家族たちの協力だった。腕を失ったことによって絆が深まり、力強い発展を始めた農場。その軌跡は、人生には無駄なことなどないことを教えてくれる。

取材・文／昆吉則 撮影／編集部

事故が育てた 経営者としての人格

荻原慎一郎（58歳）には左手がない。41歳の時、ライムソワに巻き込まれる事故だった。

半年間の入院。事故は二十歳の就農以来続けてきたボランティア活動に一区切りをつけ、農業経営に本格的に取り組もうとしていた矢先の出来事だった。農業をやめようとも考

えた。しかし、この事故が本当の意味での経営者になるきっかけを与えた。そしてもうひとつ、荻原の今を作った人生の体験がある。農業が面白くない。だからこそそのめり込んだボランティア活動だ。

それまで農業をサボっていたというわけではない。荻原が30代になる1970年代後半から80年代になると、かつて収入の中心だった薬用人参や蚕の価格が下落した。荻原は桑

を抜根し、その畑に麦を播いた。

水稻の作付けも拡大した。土地利用型経営への転換である。稼ぎ頭も父から荻原に移っていった。それでも当時の荻原にとって、農業はまだ人生を掛けるほどのものとは思いつけなかった。農業経営の担い手となつてはいても、荻原の心が燃える対象はボランティア活動だった。

農業経営者としての荻原の人生を聞いていると、つくづく人生には無駄なことはないと思えてくる。無駄にするかしないか、その違いがあるだけだ。むしろ人や経営者としての人格を育てるのは、損得を超えた努力をどれだけ面白がつてできたか、にかかっているのではあるまいか。

家族の得意分野を結集し 法人経営を軌道にのせる

荻原が経営する(有)信州ファーム荻原の経営耕地は、水田作50ha弱、麦・ソバ・大豆を中心に畑作が20ha。圃場は5市町村にまたがり、最も遠い場所が20kmも離れている。

しかし10haくらいまでの家族経営ならともかく、規模を拡大した場合には作期の拡大が経営成立の要件であり、しかも圃場の標高差が500mから800mである同農場の経営条件は、むしろ好都合だと荻原は言う。



現場の作業管理は農場長である長男・昌真^{まさまこと}（28歳）に任せてあり、昌真を中心に次男の豪^{たけし}（25歳）他4人の社員が担当している。また、昨年2月には、長女のはるか（24歳）が中心になってパン工房を立ち上げた。自家製粉の麦を使ったパンとスイーツの製造販売も始めた。妻・政伊^{まさい}（53歳）と昌真の妻・綾子（28歳）は事務と経理を担当する。

生産するコメや菓子類はインターネットでも販売しているが、仕向け先の中心は同社のコメを指定し、そのブランドを店先で表示して売ってくれる米穀店と卸である。

萩原のコメ販売は食管時代からだ。当時、コメ屋は未検査でもいくらでも買いにきた。しかし、今はそんなことで成り立つ時代ではない。

昌真は検査員の資格を取った。新しい商品戦略を考え、営業に走り回っている。萩原は若かりし日の自分がそうだったように、農業界以外での人間関係を積極的に作ろうとする昌真であればこそ、未来を託すことができると考えている。

同社のコメは長野県が特に優れた地元産品として選定する「長野県原産地呼称管理制度」に2004年以来4年連続で選ばれている。それもある、無農薬栽培のブランド米「やえはら舞」は、全日空のファー

ストークラスの食材として使われた実績もある。このブランド名は、農場のある八重原地域が高品質米産地として有名であることにちなんだものだ。

経営の基本理念を生んだ ボランティア活動

萩原が就農したのは1968年。普通高校から自動車整備の専門学校に進み、卒業した年の春だった。

やがては農業を継がねばならないと覚悟はしていた。でも、自分の間は勤め人の暮らしをしたいと考えていた。自分で自動車関係の会社に就職も決めていた。しかし、父親は就職を許さなかった。親子喧嘩になった。結局は萩原が折れて家に入ったが、不満だらけの毎日だった。

当時の農家には、息子に給料を払うなどという考えはなかった。世間では働けば給料をもらえるのが当たり前なのに。父から「金が必要なら言え」と言われてもらうお金が嫌だった。不自由をしたわけではない。でも、それは一人前の大人の働き方ではないと思った。

当時の萩原家は水田が1.8ha、畑が約2ha。経営の中心は兼用入参で、それだけでも300万円、市況によって500万円位にもなった。養蚕と1.8haの水田もある。暮らし

信州リンゴの搾りかすや、エリンギ栽培の菌床に使われたオガくずなどを堆肥に有効利用。



向きは豊かというべきものだった。

父や農業に馴染めないまま、暇さえあれば家を出て仲間と遊んでいた。酒も飲まない萩原の「遊び」とは、青年団やボランティア活動だった。

24歳の時、さらに社会活動に目覚めさせる転機が訪れた。「信州青年の船」に応募して、17日間、香港、フィリピン、返還直後の沖縄を廻る旅に参加したのだ。その事後活動として始めた、小中学生を集めての子供会活動「竹の子の会」は、萩原のボランティア活動に対する情熱を燃え上がらせることになった。

子供会活動とは子供たちの中のリーダー育成。仲間とうまく遊べない子供を集めて一緒に遊んであげる。彼らの親代わり、兄代わりをしてやることだった。

その活動を始めようと言いだしたのは萩原自身ではない。3年前に癌で亡くなった友人である。自分にとって尊敬する生涯の友だった。一緒に青年の船に乗った彼は、建具屋を自営する職人であり、戦争で父親を

圃場によっては湛水直播も実施している。



発酵熱で蒸気を上げる堆肥。堆肥化された信州リンゴは水田に散布され、そこで栽培された無農薬米は「信州りんご米・やえはら舞」として人気が高い。



クローラタイプのスプレッダ。堆肥散布に使用。

面白がって生き、失ってこそ与えられる道



就農してちょうど1年になる唐澤大富氏（35歳）。以前はゲームソフトの制作をしていた。

就農2年目、元整体師の二木仁氏（24歳）。親戚が荻原社長と知り合いという縁もあり就農。



左から、農場長を務める長男の荻原昌真氏、慎一郎氏、次男の豪氏。二人の息子が文字通りの片腕となって現場を盛り立てている。



勤続7年と、社員の中では最も古株の手塚新吾氏（34歳）。作業全般に携わる。

秋田県出身の佐藤一樹氏（28歳）。就農4年目。実は元No.1ホスト。担当は「幹事」とか。



亡くしていた。その彼がこう言った。「俺はオヤジを知らねえ。それで切ない思いもした。でもな、オヤジがいても、オヤジにオヤジの役割をしてもらってねえ子供もたくさんいるよな。だから子供会を作ってオヤジの代わりができたらいと思ってるんだ。手伝ってくれるか？」

自らの心を燃やす場所を求めていた荻原にとって、それは人生の導火線に火をつけるような言葉だった。「俺にもできるのか？」

「できるどころじゃないよ！」

それが始まりだった。この誘いがなければ、以後のボランティア活動も現在の農業経営者・荻原慎一郎も存在していなかっただろう。

最初の4～5年の間は、ほとんど二人だけの活動だった。やがて声の大きな荻原が表向きには活動の中心となり、仲間も年々増えていった。

子供会活動を通して、行政や人々に働きかけること、ともに活動する仲間を励ますことを学んだ。金のためではない活動を人に勧め、くじけそうになる仲間を励ますのである。

新聞などに活動が紹介されれば、売名行為だと中傷する人もいた。そんな時、仲間にはこう言った。

「10年続けば誰も文句を言わなくなる。もし10年続けられないなら、我われの活動に問題があるんだ」

そんなある時、子供会に参加している子供の祖母から手紙をもらった。1万円のお札が同封されたその手紙には、こう書いてあった。

「今日してきたことを、こんなにも喜んで伝える孫の姿をこれまで見たことがない。素晴らしい活動を本当にありがとう」

今考えれば、それができたのは若いその時だったからだ。人々の感謝の言葉があった。この「人に喜ばれたい」「誰かの役に立ちたい」という活動の動機は、荻原の事業経営の基本理念そのものに結びつくものだった。活動を続けていくためにこそ、お金が必要であり、人々への働きかけをする。利益は結果であり、未来への手段だ。

そのことを合理的に追求するために計画し、実行していく経営こそが、理想的な事業経営である。

荻原は自分が楽しいからボランティア活動を続けたのである。それが今になって信州ファーム荻原にとつ



レーザーレベラ。無農薬や減農薬栽培に取り組むには、均平な圃場作りも重要。

ての信用、そして信頼という無形の資産として活き始めている。かつて一緒に遊んだ子供たちは大人になった。そして彼らが信州ファーム萩原の応援団となってきているのだ。

深い絆に支えられ進むべき道を決意

先述の通り、80年代になると、30代になった萩原が家の農業の中核を担うようになっていた。麦を作るために2条刈りのコンバインを入れたのを手始めに、積極的な機械化を進めた。農協に先んじて乾燥調製設備も装備した。土壌条件に恵まれて、収量も品質も良かった。麦用に導入したコンバインや乾燥調製施設の償却を速めるため、水稲でも作業請負を増やしていった。

さらに3年ほどすると、地域の基盤整備が進み、作業条件も良くなっ

た。同時に減反の麦が増え、それをブロックリローションするので受け持ってもらえないかという要請がきた。それにもない、さらに機械設備の増強をしていった。

転作の奨励金はすべて地主に戻したが、それで十分経営は成り立った。借地面積も増えた。でも、コンバインや乾燥調製施設の導入に補助金は使っていない。目の前にぶら下げられる補助金は魅力的だが、それは麻薬だと萩原は言う。

そんな萩原が、そろそろ本格的に農業経営を事業化しようと思った矢先の事故だった。

入院は半年に及び、神を呪った。噂は一気に村に広がった。地権者たちが頼み先がなくなることを嘆く言葉も伝わってきた。

既に両親は70歳後半。子供は長男がようやく小学5年生になったとこ

ろで、元気に働けるのは妻の政伊だけだ。ついに萩原は言った。

「百姓やめるか。土地を返して2〜3町歩の水田なら二人でできるよ」

言った自分が悔しくて泣けた。でも、かつて子供の仲間でもあった政伊はそれに笑って答えた。

「馬鹿言ってるんじゃないわよ。死ぬわけじゃあるまいし。手が一本なくなっただけで、まだ右手があるでしょ。今に、アンタなら放っておいて

も右手一本でやるわよ。できないというのなら私がやる」

その言葉で吹っ切れた。むしろ、昔以上に農業をやりたくなくなってきた。うまくいくかどうかは別にして、その気になってやってみて、駄目なら駄目でしょうがないではないか。

さらに、事故直後にボランティア活動を一緒にやってきた若い友人が「萩原さんのところを手伝いたい」



①農機と並ぶ昌真氏の愛車、フォルクスワーゲン。昌真氏の自動車整備の腕前が農機のメンテにも活かされている。②大規模な土地利用型農業を可能にしているバワクロ。③バーチカルハローによる碎土・整地作業も、均平な圃場作りに有効。④ブラソイラDX。⑤の写真のように、チゼル先端部を強化して磨耗を軽減している。

と言ってきてくれた。31歳の彼は、農大を出て勤めに出ていて、やがては農業をやりたいと思っている人だった。でも、萩原の経営は10ha程度。家族経営のサイズだ。願ってもない申し出ではあったが、まだ未来に確信を持ってないでいた萩原は、二度までは断った。

「10haで人を入れたらうちもやっていけない。もう一度考え直せ」

しかし、彼の意思は固かった。

妻の政伊と若い友人が萩原を立ち直らせた。そればかりでなく、手を失えばこそ雇用が必要となり、それを実現するためには規模拡大を進めなければならぬ。萩原は作業者としてではなく、経営者としての本当の役割を果たすことになったのだ。

若い友人は、萩原が退院する前に会社を辞め、農場で働き始めていた。彼が、萩原にとっての第一号の社員



2007年に開設したパン工房では、自家製の小麦粉を使用したパンやケーキを作っている。

パン工房のスタッフ。左から昌真氏の奥様・綾子さん、慎一郎氏の奥様・政伊さん、長女のはるかさん。敢えて味付けを控え、素材感を楽しめる商品作りを心がけている



⑥事務所に貼られたANAのポスター。2006年の夏、「やえはら舞」は国際線のファーストクラスとビジネスクラスで機内食に採用された。⑦整理整頓が行き届いた乾燥調製施設。⑧事務所の向かいにあるパン工房。

である。彼はそれから5年間勤め、今では自分の家に戻り農業経営をやっている。
そうと決めたらベッドの上から指示を出し、地権者たちに心配は要らないと電話し、農機具屋を病室に呼びつけて機械を注文した。従来の保温折衷育苗は手間がかかるので、ハウス育苗に切り替えることにもした。そのためのハウスも必要になった。

そんな萩原の下には、若者が集まってくる。息子たちも成長した。95年、念願だった法人化を実現。当時の名称は(有)萩原だったが、06年に時代に合わせて現社名の(有)信州ファーム萩原に変更した。
経営者の仕事の本質は、作業ではない。会社の目的を定め、根本のところで運営することだ。後継者を育て、社員を励ますことだ。

親の姿を子供たちは見ている。何を語るより、自分が選んだ人生を思いっきり生きてみせること。それこそが、子供に対して与えられる最大の教育なのだ。

子供や若者たちに真に継がせるべきものがあるとするとしたら、それは親や大人の誇りである。人が自らの心の中にある核のようなものを見出すのは、自分自身にしかできない。でも、その種を植え付けてくれるのは、実は親の姿なのだ。あとは笑って見守るだけ。萩原は言う。

「元気でいる親がいなければ、子は育たねえよ。お天道さま相手の農業は、思い通りにいかないことばかり。それに挑戦して勝つ時も負ける時もある。勝ったり負けたりすることの呼吸を味わううちに、それがある種の感動になってくる。それを教えることができる、子供は放っておいても育つもんだ」
(文中敬称略)